

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 31 年 4 月 16 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03062

研究課題名(和文) 帝国と人種に関する人類学的研究 - オマーン人移民の事例から

研究課題名(英文) Anthropological study on empire and race

## 研究代表者

大川 真由子 (Okawa, Mayuko)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70571818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来歴史研究でしか扱われてこなかった「帝国」を人類学的に切り込むと新しい試みであった。研究期間中、早稲田大学文化人類学会にて「帝国と混血」のシンポジウムを組織し、オーガナイザーを務めた。イギリス帝国史、科学史、人類学でも旧日本植民地を専門とする研究者らと「帝国と混血」について議論し、その成果を学会誌『文化人類学研究』で発表した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

- ・帝国の民族誌という人類学的な分析モデルを構築することで、他分野の研究成果との対話が可能になる
- ・葛藤や交渉、親密性をはらんだ当事者の生活世界を解明し、「混血」や「人種」の概念を通文化的に検討することで、人類学におけるエスニシティ、人種研究への理論的貢献が可能となる
- ・日本国内の引揚者や今後増加が予想される海外生まれの日系二世の帰還、それに伴う国籍取得や労働市場での競争、社会的差別という我々にも身近で実践的な問題にも直結している意味で重要性をもつ

研究成果の概要(英文)：This study explores "empire" from an anthropological viewpoint, which had been dealt mainly in the historical studies. I organized symposium on empire and mixed race in 2016 and invited specialists on history of British empire, Japanese empire and the anthropologist who researches a former Japanese colony to discuss the possibility of anthropological approach to empire. The research outcome was published as a special theme "empire and mixed race" in the academic journal on the following year.

研究分野：文化人類学、中東地域研究

キーワード：オマーン ザンジバル 移民 エスニシティ 帝国 混血 人種

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が注目するオマーン人は、オマーン帝国の拡大に伴い、1830年代以降ザンジバル島をはじめとする東アフリカに移住し、脱植民地化の過程の中で1970年以降本国に帰還したり、そのまま東アフリカに残留した人びとである。彼らのようにインド洋を移動する人びとの人類学的研究は極端に少なく、歴史学研究が主流であった。申請者はこれまでオマーン移民の中でもとくにオマーンへ帰還した人びとを主要な対象として、アラブ性とアフリカ性をキーワードに彼らのエスニック・アイデンティティを考察し、単行著として2010年に刊行した。インド洋を移動するオマーン人の人類学的研究としては世界的にみてもはじめての著作である。

その後は、従来のライフ・ヒストリーや口承といった民族誌的データに、史料批判を組み合わせた歴史人類学的方法から、オマーン統治期(18世紀~1890年)、イギリス植民地期(1890~1963年)を通じて、民族や宗教・宗派、国家という多元的境界に絡められつつも、オマーン移民がさまざまな局面でフレキシブルかつグローバルなネットワークを作り出してきたことを明らかにした。そうした中気づかされたのは、通時的な視点の重要性である。「帝国(主義)」は過去のものでもなく現在も存続している。オマーン人のインタビューやテキストにも「帝国」という用語が頻出することを考えると、帝国という場に注目すべきだと思いついた。

歴史学と異なり人類学では帝国が主要な研究主題とされてこなかった。その代わり人類学における植民地研究では、支配/被支配あるいは本国/植民地という二元論の中でおもに被植民者に焦点を当ててきた流れに対し、1980~90年代以降、支配と被支配の境界の曖昧さや流動性が指摘されるようになってきた。人類学者のストラーラーらは本国と植民地との関係性も絶対的なものではなく、緊張をはらんだ様々な相互のせめぎ合いの過程で構築されるとして、「帝国の民族誌」なるものを提唱した[Cooper & Stoler 1998]。本研究で扱うオマーン人にも同様のことがいえる。彼らの場合、入植先のザンジバルでは一時期支配者層に属していたが、1890年にザンジバルがイギリスの間接統治下に入った後は支配される側に転じたという希少な経験をもっているため単純な二元論で理解できない。本研究では、ヨーロッパの帝国の事例と比較しつつ、ザンジバルという「植民地」の存在、およびそこにおける混血児や階級が本国にもたらした影響、つまり制度の連鎖に注目した帝国の民族誌をめざしたい。

## 2. 研究の目的

### (1) 帝国の表象、支配者側からみた帝国のあり方の解明(歴史研究)

1970年以降アフリカからオマーンに引き揚げて来たオマーン人による自伝やザンジバルの歴史書が2000年代になって立て続けに出版されている。彼らがオマーンによる東アフリカ統治をどのように認識しているのかを文献から読み解くのと同時に、比較対象としてオマーン政府がいかにおマーン統治を語り、歴史教育のなかに組み込んでいるかを解明する。こうした歴史表象はナショナル・アイデンティティ強化に影響すると考えられる。さらにはヨーロッパ側およびアフリカ側によるオマーン帝国の表象と比較することで、支配者側からみた帝国のあり方が浮き彫りになる。

### (2) 混血であることおよび人種制度の連鎖の解明(民族誌的研究)

東アフリカに渡ったオマーン人は現地のスワヒリと呼ばれるアフリカ人ムスリムと通婚することで、大半が混血となった。これはヨーロッパの植民地でみられた現象とは大きく異なっている。オマーン帝国(19世紀前半~1890)において混血であること、そして帝国解体後、帰還先のオマーンおよび東アフリカで混血であることについて考察す

る。人種的範疇が概念として定着するとともにその内容が揺れ動き、また作り直されるダイナミズム、さらには植民地での人種・階級制度がいかに帰還後の本国にも影響を及ぼしたのか、植民地と本国における混血の問題を帝国という枠組みに広げて議論する。

### (3) 「帝国の民族誌」をめぐる理論的考察(比較研究)

日本の引揚者やアルジェリアからのフランス人引揚者など、脱植民地化の過程で本国に戻った移民の人類学的研究は2000年代に入って着手されたばかりである。オマーン移民を帝国という視点からとらえ直すことは、移住先/帰還先あるいは本国/植民地といった二項対立を批判しつつ、「帝国」の概念を再検討することにもつながる。ヨーロッパや日本の帝国との比較において、オマーン移民やアラブ・イスラーム的統治形態、さらには人種の分類形態の特質を実証的に明らかにする。ストーラーらが提唱した「帝国の民族誌」を中東・東アフリカというヨーロッパ以外の地域の事例で試みる。

## 3. 研究の方法

本研究ではオマーン帝国内を移動していたオマーン人を民族誌的かつ歴史人類学的に考察する。これまでの調査は、帝国以降(本国帰還後)のオマーン人が中心的調査対象であったが、本研究では主要な移住先であったタンザニアのザンジバル島と大陸の沿岸部に居住するオマーン移民も研究対象に加える。オマーン統治期(17世紀~1890)およびイギリス統治期(1890~1964)の帝国表象については大英図書館や英国および東アフリカ各地の古文書館での文献調査を、現在のオマーン移民の帝国認識についてはオマーン、東アフリカ双方での聞き取り調査を実施する。東アフリカのオマーン移民に関する歴史研究はここ10年のうちに数点登場しているが、残留する彼らの民族誌的研究は皆無である。研究期間は4年を予定しており、順次、歴史研究、現地調査、研究者との情報交換を遂行していく。また比較研究のために共同研究会の組織も検討している。

## 4. 研究成果

本研究の成果は以下の点が挙げられる。

### (1) 帝国の表象の解明

オマーンの歴史教科書およびアフリカから引き揚げて来たオマーン人による自伝やザンジバルの歴史書を分析し、いかに現在のオマーン政府がナショナリズムの一環として、1970年に誕生した近代国家オマーンの国民が共通して誇れるような「オマーン帝国」という過去の栄光を設定し、ナショナル・アイデンティティの源泉のひとつとして普及させたかを明らかにした【雑誌論文】。

### (2) オマーン帝国における人種制度の解明

オマーン帝国において混血であること、そして帝国解体後、帰還先のオマーンで混血であることについて考察した【雑誌論文】。そこでは第一に、帝国内における人種観、とくに混血の処遇をあきらかにすることで、白人/現地人という西欧の近代帝国による人種に基づく統治とは異なる両者の関係性について提示した。第二に、時間軸を現代にまで延長して、帝国期と帝国後で混血であることがどのように変容したかをあきらかにした。第三に、植民地主義を被支配者の視点ではなく、これまで人類学において焦点を当てられてこなかった(旧)支配者の立場から考察した。こうした作業を通じて、ストーラーとクーパーが提唱した帝国の民族誌に接近すること、そして西欧の近代帝国を中心に展開されてきた帝国研究に一石を投じることができたと思われる。

### (3) 「帝国の民族誌」をめぐる理論的考察

「帝国」を正面から論じる人類学的研究がないなか、宗主国側のイデオロギーや統治体制に関心を注ぎ、従来の帝国研究を牽引してきた歴史学からの専門家と、逆に被支配者のミクロな視点から植民地史を描写してきた人類学からの専門家とともに共同研究を組織し、2016年に早稲田大学文化人類学会にて「帝国と混血」というシンポジウムを開催した【学会発表】。大英帝国、日本帝国との比較において、人種に関わるオマーンのアラブ・イスラーム的統治形態を相対化するとともに、「帝国後」という現在の視点を盛り込む重要性を指摘し、「帝国の民族誌」への入り口を開くための布石とした【雑誌論文】。なお、「帝国後」を扱った論考としては【雑誌論文】と【雑誌論文】がある。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 5 件)

Mayuko Okawa, 2015 “The Empire of Oman in the Formation of National History: An analysis of School Social Studies Textbooks and Teachers’ Guidelines”, *Annual of Japanese Association of Middle East Studies*. 31(1): 95-120.

大川真由子 2016 「帝国の子どもたち オマーン帝国 / 後における混血の処遇」『文化人類学研究』17: 26-46.

大川真由子 2016 「巻頭言・帝国と混血」『文化人類学研究』17: i-vii.

Mayuko Okawa 2016 “Ethnicity or Tribe? Social Cleavage in Omani Employment Patterns” 『人文学研究所報』56: 13-24.

大川真由子 2016 「序 帰還から故郷を問う」『文化人類学』80(4): 534-548.

### 〔学会発表〕(計 1 件)

「帝国と混血 人類学的視点から」2016年度早稲田人類学会第17回総会、公開シンポジウム「帝国と混血」早稲田大学、2016年1月30日。

### 〔図書〕(計 3 件)

大川真由子 他、明石書店、松尾昌樹(編)『オマーンを知るための55章』((うち12章分およびコラム担当)、2018年。

大川真由子 他 シーエムシー出版、民谷栄一・富沢寿勇(監修)『ハラールサイエンスの展望』、2019年、151-158.

大川真由子 他 御茶の水書房、上原雅文(編)『自然・人間・神々 時代と地域の交差する場』、2019年、213-249.

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。